

「湖の上を歩いて」

マルコの福音書 6:45～52

はじめに

今日の箇所は、前回述べた、イエシュアの「五千人の給食の奇蹟」の続きとして記されている出来事です。一つ確認しておきたいと思いますが、マルコの福音書ではこの「五千人の給食の奇蹟」は、パンと魚を食べた群衆に対して表されたものというよりはむしろ、弟子たちに示されたものとして描かれています。それはマタイ、ルカの福音書も同様で、ヨハネだけが群衆の視点からもこれを記しています。ですからこの奇蹟は、おもにイエシュアが弟子たちに対して表されたものであったと考えられます。それはつまり、神のご計画においてイエシュアの弟子たちがどのような存在であるのかということが示されたということです。イエシュアが祝福したパンと魚は、彼ら弟子たちの手に渡され、そこから群衆へと配られました。それは神の国における以下の事実を指し示していると考えられます。

【新改訳 2017】マタイの福音書

19:28 そこでイエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めます。

「人の子がその栄光の座に着く…その新しい世界」すなわち「神の国」が完成する時、「イスラエルの十二の部族」すなわち全てのイスラエルの民は、彼ら使徒とも呼ばれる十二弟子によって治められるのです。この約束、このご計画はイエシュアとイスラエル、そして教会を中心として形成される「神の国」の内実をより具体的に示したもので、このイエシュアの十二弟子たちの存在が「神の国」においていかに重要であるかがわかります。そして今日の箇所は、イエシュアが湖の上をまるで地面のように歩かれたという奇蹟を記していますが、この出来事もまたイエシュアが弟子たちだけに表されたものです。この出来事は確実に弟子たちだけが目撃した、彼らにのみ表された奇蹟、しるしです。その事実を踏まえつつ、内容に入っていきます。

1. ベツサイダ

【新改訳 2017】マルコの福音書

6:45 それからすぐに、イエスは弟子たちを無理やり舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダに先に行かせて、その間に、ご自分は群衆を解散させておられた。

イエシュアは弟子たちを「ベツサイダ」という地に行かせようとしておられます。「漁師の家」という意味のこの町は、弟子のペテロとアンデレ、そしてピリポの出身地であることがヨハネの福音書 1:44 に明示されていますが、なぜイエシュアは弟子たちにそこへ行くようにと命じられたのでしょうか。これをヘブル語の視点で考えるならば、「漁師（獵師）」のことをツァイド(תַּיִד)といいます。この言葉は本来「獵師、狩人」と訳され、ある一人の人物を指していました。

【新改訳 2017】創世記

10:8 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の勇士となった。

10:9 彼は【主】の前に力ある狩人であった。それゆえ、「【主】の前に力ある狩人ニムロデのように」と言われるようになった。

このように聖書で最初のツアイドは、ニムロデという「地上で最初の勇士」、「【主】の前に力ある」者を指し示す言葉として用いられています。この意味をもってベツサイダ「漁師の家」という名を捉え、そこにイエシュアが弟子たちを行かせられたという出来事を見るならば、ここにも神のご計画におけるイエシュアの十二弟子の存在がどのようなものかが表されており、つまりやがて「神の国」において彼らがそれぞれ権威ある立場、民の上に立てられる指導者、統治者的存在として、神がこの弟子たちを選んでおられるということが表されていると考えられます。

また弟子たちをベツサイダに向かわせる一方で、イエシュアはパンと魚を食べて満腹したあの群衆を「解散させて」おられますが、ここに使われているシャーラハ(חֲלָה)という言葉は本来、「遣わす、手を伸ばす」という意味を持った言葉で、その最初の言及は創世記 3:22 です。

【新改訳 2017】創世記

3:22 神である【主】はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりようになり、善悪を知るようになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」

これはエデンの園において罪を犯した人、アダムとその妻エバについて言われた御言葉です。内容としては否定的に記されていますが、「手を伸ばして」と訳された聖書で最初のシャーラハは、「いのちの木からも取って食べ、永遠に生きること」を指し示しているのです。ですからイエシュアが「群衆を解散させておられた」という記述、この出来事にはイエシュアが人を永遠に生きる者としてくださること、神が人をお造りになられた時の本来の状態に回復させてくださるということが表されており、その事実が先に述べた「ベツサイダ」という名に指し示された、イエシュアの弟子たちが「地上で最初の勇士」、「【主】の前に力ある」者とされる時、すなわち「神の国」が建つ時において実現するということが、このマルコ 6:45 には「型」として表されていると考えられます。

ちなみにこのシャーラハと同じ綴りのシェラフ(חֲלָף)は、イスラエルの民の別称であるヘブル人(עִבְרִי)の由来となったエベル(עֵבֶר)の父の名です(創世記 10:24、11:14)。また「向こう岸」エーヴェル(עֵבֶר)、「行かせて」アーヴァル(עֵבֶר)という具合に、文節全体にヘブル人すなわちイスラエルが暗示されており、「神の国」とイスラエルの民との密接な結びつきを表していると考えられます。

2. 祈る

【新改訳 2017】マルコの福音書

6:46 そして彼らに別れを告げると、祈るために山に向かわれた。

次にイエシュアはひとり山に向かわれています。山に行くことが目的なのではなく、それが「祈るため」であったことが明示されています。ここに使われているパーラル(פָּרַל)は本来、イスラエルの父祖アブラハムの祈りを指し示した言葉です。

【新改訳 2017】創世記

20:7 …あの人（アブラハム）は預言者で、あなた（アビメレク）のために祈ってくれるだろう。そして、いのちを得なさい。しかし、返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬことを承知していなさい。」

これは神がゲラルの王アビメレクの夢に現れ、彼に告げられた御言葉です。アブラハムがパーラル「祈ってくれる」ことで「いのちを得」ることが約束されています。このように、パーラルとは本来、アブラハムの祈りによって、アブラハムを通して救われる、生かされることを指し示した言葉であると考えられます。それは神がアブラハムと交わされた以下の契約と結びつきます。

【新改訳 2017】創世記

22:15 【主】の使いは再び天からアブラハムを呼んで、

22:16 こう言われた。「わたしは自分にかけて誓う——【主】のことば——。あなたがこれを行い、自分の子、自分のひとり子を惜しまなかったので、

22:17 確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。

22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。」

このように、確かに神はヘブル人アブラハムのゆえに、その子孫イスラエルの民を通して地上のすべての国々にいのちを得させる、祝福するというご計画をお立てになっています。これが成就、実現することが「神の国」です。ですからイエシュアが「祈るために山に向かわれた」というこの行為には、アブラハムの子孫、イスラエルの民が「神の国」において地位の高い、特別な民となることが示されており、それによってその他の「地のすべての国々は祝福を受けるようになる」ということが表されていると考えられます。

3. 分ける

【新改訳 2017】マルコの福音書

6:47 夕方になったとき、舟は湖の真ん中にあり、イエスだけが陸地におられた。

時は「夕方になった」とあります。日が沈み、あたりが暗くなり始めるこの時間帯は、私たちにとって一日の終わりを感ぜさせますが、聖書ではどうでしょうか。

【新改訳 2017】創世記

1:5 神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

これは「夕方」エレヴ(עֶרֶב)という言葉が聖書で最初に使われた箇所です。神の天地創造の御業の第一日、その完了、終わりを指し示すのがこのエレヴです。しかしそれは同時に夜明け、朝へと続き、第二日、三日、四日と続く新しい始まりを指し示しているとも言えます。このように、終わりとは始まりの間、区切りを表す言葉、それが本来のエレヴです。そしてその意味をさらに強調するかのように「舟は湖の真ん中にあり、イエスだけが陸地におられた。」という描写が続きます。「真ん中」と訳されたターヴェク(תָּוֶק)、「陸地」ヤバーシャー(הַבָּשָׂר)、これらの言葉もまた本来は、区切る、分けることを指し示しています。

【新改訳 2017】創世記

1:6 神は仰せられた。「大空よ、水の真ただ中にあれ。水と水の間を分けるものとなれ。」

1:9 神は仰せられた。「天の下の水は一つの所に集まれ。乾いた所が現れよ。」すると、そのようになった。

神のご計画の完成である「神の国」、これが実現する、始まることは、同時に今のこの世、この時代が終わりを迎えることを示します。そして神に聞き従う者、すなわち神がお選びになった者を集められ、そうでない者と分け、裁き、神による救いと滅びが、「神の国」が実現する時に起こります。この文節にはその神の裁きと、世の終わり、そして新しい時代の始まりという事実が「神の国」の到来、完成、実現の時に起こる出来事として表されていると考えられます。

4. 通り過ぎる

【新改訳 2017】マルコの福音書

6:48 イエスは、弟子たちが向かい風のために漕ぎあぐねているのを見て、夜明けが近づいたころ、湖の上を歩いて彼らのところへ行かれた。そばを通り過ぎるおつもりであった。

ここで驚くべきことが起こります。イエシュアが「湖の上を歩いて彼らのところへ行かれた」ということです。私たちの常識ではこんなことはあり得ません。湖の上、水面を歩かれたということですが、これはほとんど宙に浮いて空中を歩いている、飛んでいるのと同じです。結論から述べてこれはイエシュアの空中再臨、教会の携挙の出来事を表した「型」であると考えられます。その根拠は、「そばを通り過ぎるおつもりであった」とあるように、一瞬弟子たちの方に来られたように見えて、実際にはそうでなかったという事実です。イエシュアの空中再臨、教会の携挙は、世の終わりに起こる、文字通りイエシュアが空中に現れる出来事で、その目的はイスラエルの民、ユダヤ人ではなく、イエスはキリスト、すなわちイエシュアはメシアであると信じる私たち教会を集め、天に携え上げるというものです。

【新改訳 2017】I テサロニケ人への手紙

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

私たち教会にとってはこの預言は福音ですが、地上に残されるイスラエルの民、ユダヤ人とも呼ばれる彼らにとっては非常な驚きと、そして苦しみと悲しみです。地上にはこの時「これまでにない大きな苦難がある（マタイ 24:21）」とイエシュアご自身もイスラエルの民に対して預言しておられます。真っ暗な海の真ん中で「向かい風のために漕ぎあぐねている」弟子たちの姿に、その事実が「型」として表されていると考えられます。ここで「あぐねている」と訳されているヤーガ(יָגַג)の最初の言及も、イスラエルの民が悲惨な苦しみを受けることを指し示しています。

【新改訳 2017】申命記

25:18 彼ら（アマレク人）は神を恐れることなく、あなた（イスラエル人）が疲れて弱っているときに、道であなたに会い、あなたのうしろの落伍者をすべて切り倒したのである。

ここで「弱っている」と訳されているのが聖書で最初のヤーガです。世の終わりには、このような、いやそれ以上の苦しみが「うしろの落伍者」すなわち地上に残されたイスラエルの民の上にやがて起こるので

5. 幽霊

【新改訳 2017】マルコの福音書

6:49 しかし、イエスが湖の上を歩いておられるのを見た弟子たちは、幽霊だと思い、叫び声をあげた。

弟子たちはここでイエシュアを見つけます。そして「幽霊」だと思ったとあります。無理ありません。なにしろイエシュアは湖の上を歩いておられたのですから。しかしこれはヘブル語ではマルエー・ルーアハ(מְרִיאָהּ רוּחַ)となり、直訳すると「見える霊」という意味になります。普通、霊は肉眼では見えません。ですからここで弟子たちはイエシュアをしっかりと「見た」ということです。そしてここで使われている「見る」という意味のラーアー(רָאָה)は本来、神のものとそうでないものを見分ける、区別するという意味をもった言葉です。（創世記 1:4）ですからここには、やがて世の終わりに、イエシュアの空中再臨の時に携拳されず、地上に残されたイスラエルの民が、まさに「見える霊」見させる、見分ける霊を受ける、注がれることによって彼らの目が開かれ、イエシュアを神の御子メシアであると見分ける、判別する、認める、理解するようになることが表されていると考えられます。それはこう預言されているとおりです。

【新改訳 2017】ゼカリヤ書

12:9 その日、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

「恵みと嘆願の霊」がイスラエルの民に注がれる時、彼らは自分たちが、自分たちの先祖が十字架にかけて殺した御方が、なんと自分たちが待ち望んでいた神の御子メシアであったという事実に目が開かれ、気づかされるのが預言されています。イエシュアを見て「幽霊」だと思った弟子たちの姿に、その成就が表されていると考えられます。今現在も、ほとんどのイスラエル人、ユダヤ人たちはイエシュアがメシアであることを認めません。それどころかその名を口にすることさえ拒むほどにイエシュアを忌み嫌っています。しかし聖書の預言は必ず成就します。そして「その日」その時、定められた終わりの日にイエシュアはついにイスラエルの民のもとに帰って来られます。その事実が次の場面に表されています。

6. 話しかける

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:50 みなイエスを見ておびえてしまったのである。そこで、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。

イエシュアは弟子たちに対して「話しかけ」られました。ここに使われているダーヴァル(דַּבַּר)は本来、神が箱舟の中にいたノアに語られたことを指し示しています。その内容はこうでした。

【新改訳 2017】 創世記

8:15 神はノアに告げられた。

8:16 「あなたは、妻と、息子たちと、息子たちの妻たちとともに箱舟から出なさい。

8:17 すべての肉なるもののうち、あなたとともにいる生き物すべて、鳥、家畜、地の上を這うすべてのものが、あなたとともに出るようにしなさい。それらが地に群がり、地の上で生み、そして増えるようにしなさい。」

「神はノアに告げられた。」ここに聖書で最初のダーヴァルがあります。そしてそれは「地に群がり、地の上で生み、そして増えるように」という神の祝福を指し示しています。ですから「そこで、イエスはすぐに彼らに話しかけ」られたというこの行為には、イエシュアがこの地上に、イスラエルの民のもとに帰って来られ、「神の国」においてイスラエルと、そして「ともにいる生き物すべて」が祝福されることが表されていると考えられます。

7. パンのこと

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:51 そして、彼らのいる舟に乗り込まれると、風はやんだ。弟子たちは心の中で非常に驚いた。

6:52 彼らはパンのことを理解せず、その心が頑なになっていたからである。

イエシュアは舟に「乗り込まれ」ました。ここに使われているヤーラド(יָרָד)は本来、「乗る」ではなく「降りる」という意味で、神が人のもとに降りて来られることを意味する言葉です(創世記 11:5)。ですから、イエシュアが弟子たちのところに来られ、舟に乗りこまれたというこの出来事には、イエシュアがイスラエルの民のもとに降りて来られる、すなわち地上再臨されることが表されていると考えられます。これが成就する時、初めてイスラエルの民は先に述べた神の祝福に与り、そしてすべての国々を祝福する民となり、「神の国」のご計画は完成するのです。

このように、「神の国」はイスラエルの民が苦難の中を通り、それを経た後に祝福を受けるという形で成就、実現するという仕組みを持っており、マルコの福音書はそれを「パンのこと」と呼んでいます。それは「パン」、ヘブル語でレヘム(לֶחֶם)という言葉が、本来そのような意味で使われた言葉だからだと考えられます。

【新改訳 2017】創世記

3:17 また、人に言われた。「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。

3:18 大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

レヘムは本来「糧」という食物全般を指す意味で使われました。「顔に汗を流して糧を得」とあるように、レヘムとは本来、「苦しんで」労働によって、労苦を経て得るものという、苦しみの中を通らなければ受けられないものを指し示す言葉であると考えられます。ですからイスラエルの民は、神の選びの民として、どうしても苦しみの道を歩まなければならないのです。しかしそれは何もイスラエルの民だけではありません。

【新改訳 2017】ローマ人への手紙

8:22 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。

この「被造物のすべて」には、当然私たち一人ひとりも含まれます。すべてのものが死を恐れ、様々なものに束縛され、思い通りに生きられない苦しみの中に日々置かれています。だからこそ、このすべての苦しみから解放される「神の国」が必要なのです。しかし逆を言えば、この苦しみがあるからこそ「神の国」を求めることができるというのも真理です。ですからどうか、今それぞれが抱えている苦しみ、痛み、悩みが、「神の国」に目をとめ、これを求め、待ち望む力となりますように。私たちの主イエシュアこそがそのような歩みをされた、模範となる御方です。

【新改訳 2017】ヘブル人への手紙

12:2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをもともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。

イエシュアは、誰よりも「ご自分の前に置かれた喜び」すなわち「神の国」を理解しておられました。そしてそれを切に、ただひたすらに求めておられました。だからこそどんな苦しみにも耐え忍ぶことができたのです。そのイエシュアご自身がこう言っておられます。「まず神の国と神の義を求めなさい。(マタイ6:33)」と。

8. 湖の上

最後に、今日の主題であるイエシュアが「湖の上」を歩かれたという出来事について述べておきたいと思います。それは「湖、海」を意味するヤーム(𐤀𐤃𐤍)という言葉の持つ本来の意味にあると考えられます。

【新改訳 2017】 創世記

1:9 神は仰せられた。「天の下の水は一つの所に集まれ。乾いた所が現れよ。」すると、そのようになった。

1:10 神は乾いた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。

このように「海」ヤームとは本来、「一つの所に集まれ」という神の仰せ、御言葉によって集められた存在を表した言葉です。ですからイエシュアが「湖の上」を歩かれたというこの奇蹟は、イエシュアのみもとに集められる者たちを指し示しており、そしてそれらはイエシュアの空中再臨によって携挙される教会と、そして地上再臨によって集められるイスラエルの民であることが、今日の箇所¹⁾に記された一連の出来事の中に「型」として表されていると考えられます。

今日の内容は、描かれている状況だけを見ても、「イエシュアが来られる」ということが驚くべき出来事として記されています。しかしこれはあくまでも「型」であり、やがてイエシュアが天から降りて来られる、再臨を指し示したものであるということ述べました。このように、イエシュアはご自分に関する出来事、そこでなされる言動、行動のすべてにこれから後に起こる神のご計画を表しておられます。そしてそれらはすべて「神の国、御国」を指し示しています。聖書に表された、いや隠された「神の国、御国」を見出すこと、これこそが今の私たちのとるべき神の国を求める実際的な行為、姿勢ではないでしょうか。幽霊…ではなく、「見させる霊」である聖霊の助けによって、これからも聖書に記された「神の国、御国」を見させていただきたいと願います。